



Osaka Gakuin University Repository

Title	Monica Sone <i>Nisei Daughter</i> の背景 —Betty MacDonald との友情をめぐる— The Background on Monica Sone's <i>Nisei Daughter</i> —Her Friendship with Betty MacDonald—
Author(s)	永岡 規伊子 (Kiiko Nagaoka)
Citation	大阪学院大学 外国語論集 (OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES), 第 83, 84 号 : 1-24
Issue Date	2022.12.31
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

Monica Sone *Nisei Daughter* の背景 ——Betty MacDonald との友情をめぐって——

永 岡 規伊子

はじめに

アメリカ西海岸で東洋人への差別、とくに排日の運動が厳しさを増していた時代にモニカ・和子・糸井（1919-2011）は、日系二世としてシアトルで生まれた。ミニドカ強制収容所 (Minidoka Relocation Center) の体験を経て、戦後カリフォルニア州出身の同じ日系二世のゲーリー・マサミ・曽根と27歳で結婚し、モニカ・ソネとして1953年にこの自伝が出版された。3男1女のうち、娘である二人目の子どもの母親となった34歳の時であった。

人種とジェンダーという二重の差別を想起させる *Nisei Daughter* というタイトルで、自らの半生を正確に記録し、また細やかな心の動きを正直に感性豊かに描写したこの作品は、1920年代から終戦までのアメリカ日系社会の証言となる資料として、歴史や社会学的な研究に貢献してきた¹。Wongによると、これは1950年代のアジア系アメリカ人による数少ない出版物の一つであり、とりわけ強制収容所の体験を女性の視点から明らかにされた最初の一冊であったという²。またその過酷な現実にもかかわらず温かいユーモアと客観的な観察・深い洞察をもって描かれていることから、当時アメリカの主要紙で高く評価された³。その後、1976年に日系人の強制収容が国家の過ちであったとアメリカ政府が初めて認めたことをきっかけに⁴、この作品は再び脚光を浴びてワシントン大学出版局より1979年に再版されている。また二つの異なった文化の間で育つ移民二世という、アイデンティティの獲得がきわめて困難な状況で、しかも市民権を持つ祖国アメリカで敵国人とみなされる苦難の中にあっ

て、自己を確立していく苦悩と成長の様子が克明に語られていることから、これまで文化的同化の観点から多く論じられ、多文化研究や文学研究のテーマを与えてきた作品でもある⁵。

そのような学際的な研究の蓄積の中で、モニカ・ソネと一人のアメリカ人女性作家ベティ・マクドナルド（1907-1958）との交流について、筆者の知る限りでは、これまで取り上げられたことはなかった。*Nisei Daughter* が完成間近だった1951年に、日本の婦人雑誌の編集長宛てに送られたベティ・マクドナルドの手紙と、翌年それに応じる形で同じ雑誌に寄稿されたモニカ・ソネの手記を手掛かりに、この作品が出版に至った事情と二人の作家の影響関係について明らかにし、*Nisei Daughter* の新たな読みの可能性を考えたい。

1. *Nisei Daughter* のクリスと *The Plague and I* のキミ

自伝として一人称で語られる *Nisei Daughter* において、作者であり主人公であるモニカ（作品の中では日本名で Kazuko, Kazu, Kazi, Ka-chan と呼ばれる）はシアトル郊外のサナトリウム（結核療養所）で同じ病室になったクリスとの出会いを次のように描いている。モニカは療養所で18歳の誕生日を迎えていることから1937年の出来事である。

（病室の）3つ目の隅にいるクリスは、明るい赤褐色のふわふわした髪をしていた。よく笑い、そのさわやかなユーモアは単調な日常生活を吹き飛ばしてくれた。私はクリスの心を分析してみようとしたが、どうしてこんなに快活になれるのかが理解できなかった。（*Nisei* 138）

そして *Nisei Daughter* と同様、自伝文学として知られる *The Plague and I* (1948) でも、語り手であり主人公であるベティは若い日本人女性キミとの出会いを次のように印象深く描いている。

（病室の）北西の隅には小さな日本人の娘がいて、華奢な淡褐色の両手をじっと胸の上で組み合わせていた。彼女はキミ・サンボウ (Kimi Sanbo) という名前だった。まっすぐに豊かな黒髪を真ん中で分け、きっちりと後

ろに引き結めて青い櫛で留めていた。くっきりした黒い眉毛はこめかみに届き、黒い瞳がボタンホールのように大きく、鋭く光っている。頬はつややかなピンク色をしていた。彼女は静かに黙っていた。(Plague 45)

このように互いの作中人物として仮名で紹介されるクリスとキミこそが、ベティとモニカであることが、『婦人朝日』に載せた二人の手記から以下のように明らかにされる。

ベティは、「多分貴誌の読者達は『病氣と私』に出て来る日本女性キミが非常に幸福な生活を送り、大変な成功をしたことに興味がおありと思います。キミの本名はイトイ・カズコといいましたが、現在ではソネ・カズコです」(ベティ 68)と書いている。そしてモニカは、「ベッティ (マクドナルド夫人) と識り合ったのは、あるサナトリウムに入った時のことで、そのころ私は十八歳のおずおずした娘だった」(モニカ 98) と語るのである。これらの手記は、*Nisei Daughter* と *The Plague and I* という二つの自伝作品と相関し、その世界を補う重要な資料と言えるだろう。

2. モニカとベティの友情と *Nisei Daughter* 出版の事情

ベティ・マクドナルドは、サナトリウムでの経験から8年後に出版した *The Egg and I* (1945年) が発売1年で100万部を売って一躍有名になった作家である。他にも、前述の *The Plague and I*、*Anybody Can Do Anything* (1950年)、*Onions in the Stew* (1955年)、とタイトルからもわかるように、いわゆるノンフィクション作品として自らの日常生活を明るいうーモアで描いている⁶。また自分の娘たちに話して聞かせた童話を *Mrs. Piggle-Wiggle* というシリーズで出版している。

ベティの名は日本でも知られるようになって⁷、『婦人朝日』が1951年の新年号に彼女のメッセージを載せたいと依頼した。しかし依頼の手紙が彼女の手へ渡るのが遅れて、メッセージを寄稿できなかったお詫びに雑誌編集長宛てに送った手紙が、そのまま同年7月号に載せられたという経緯であった。

モニカは手記の中で、旧知の友であったベティがこのように作家として成功したことに歓喜し、「ベッティの『卵と私』が出版されて全米をアッといわせたのはそのころだった。私は彼女がずっと前から物を書いていたのを知っていたので、狂いようになって喜んだ」(モニカ 99) と振り返っている。

実際モニカは、「以前私はサナトリウムでの経験を題材としたベッティの原稿の下書きを読んだことがあった。この本はそのころこの出版社でも肺病のような陰気なことを書いたものは誰も読まないと判り切っているといつて、相手にしてくれなかったものだ」(モニカ 99) と書いている。そして戦争によって二人が会えなくなってからも、長年にわたって文通による交流は続き、モニカの手紙に書かれた戦中・戦後の苦難の日々を綴った文章をベティも読んでいた。

そして、「私自身もある日アトランティック・マンスリー出版社から、米国における二世の経験について本を書いてみないかといわれ愉快的驚きを感じたのであった。これには何か不思議な方法でベッティが介在していることが私には判っていた」(モニカ 99) と出版の事情が述べられる。モニカのユーモアのセンスや文章の才能を知っていたベティが、自分の本の出版社にモニカを紹介したのであった。そのことについてベティの手記ではこのように詳しく説明されている。

カズコと私はしょっちゅう文通しておりますが、彼女の手紙がとても才気があって面白いので、ある時、その一通をアトランティック・マンスリー出版社の編集者に見せて、『カズコは物が書けると思うけど、どう?』とたずねました。その編集者は、この人は物になるといつたばかりでなく、こちらから出掛けて行って何か手始めになるようなものを書かせなければならぬ、といつて本当に出掛けて行きました。彼女が書き始めた本はもう二章ばかりで出来上がりますが、アトランティック・マンスリー出版社の編集者は、その本の成功に最大の期待を持っています。カズコは私のエージェント（代理業者）の顧客として受け入れられましたが、私のエー

ジェントは文学方面では最高のエージェントですし、私の知っている限りでは、これまで何年もの間、一人も新しい顧客を受付けていなかったのです。(ベティ 68-9)

これらの手記からわかるのは、第一に、ベティの仲介によって、アトランティック・マンスリー出版社の編集者に勧められて執筆されたのが *Nisei Daughter* であったこと、第二に、求められた内容が「アメリカにおける二世の体験」であったことである。このことは、戦後の早い時期に日系二世の収容所での体験が出版されるという異例の事情を説明してくれる。そして、第三にベティの手記に記された編集者のモニカへの高い評価は、彼女の才能を証するものである。また同時に、女性による自伝が当時アメリカだけでなく多くの国々で翻訳されて大きな反響を呼んだ背景を考えると、ベティの自伝に匹敵するような女性の自伝がモニカに期待されていたことがわかる。

3. サナトリウム時代の二人の交流がモニカにもたらしたもの

この二人の交流が実人生で影響を及ぼしたことは、当然のことながら、自伝作品の中でも描かれることになる。作品世界の主人公のアイデンティティの模索が *Nisei Daughter* の主要なテーマであるが、モニカの人間形成に影響を与えた多くのエピソードの中でも、サナトリウムでのこの二人の出会いが大きな意味を持つ。

その重要性が窺えるのが *Nisei Daughter* の次の場面である。

療養所で、私は仲間と歩調が合っているわけではないことに気づいた。
アメリカナイズした自分に自信があったので、このようなずれを感じるの
は少しショックだった。父や母よりずっと上手に英語を話すことができた
し、血のように赤いマニキュアや濃い紫色の口紅をつけることに何の躊躇
もない、そんな鼻高々の私は両親を不快にさせたものだ。しかし、ここで
私は自信を失い始めていた。(Nisei 139)

日系コミュニティの中では自身をヤンキーと自認するモニカだったが、初めて

独りで「本当の」アメリカ人と寝食を共にした時、気後れしている自分に「自信を失う」。しかし、それから9カ月が経ち、退院を目前にしたモニカは次のように語る。

一瞬、泣くべきか怒るべきかわからなかったが、彼女たちが温かい愛情をこめて私を見ているのを見ると、突然気が楽になった。クリス、ローラ、アン、エレインと他の仲間は、そのままの自分で仲間に受け入れてくれたのだ。私の外観が違い、少しおかしいことを言ったり、したりしても彼女たちが気にしなかったのは、基本的に私たちはお互いが好きだったからだ。人生で初めて、私は自分自身であることに本当の幸福を感じた。

(Nisei 143)

ここに至るまでには、モニカが自分自身を発見する大きなきっかけとなる、サナトリウム内でのエピソードが語られる。それは、初めて会うローラに対してフレンドリーではなかったとクリス（＝ベティ）に指摘される場面である。ローラに向かって精一杯笑顔を浮かべていたモニカには、クリスの言う意味がわからない。しかし、後に日系人のナミとマリーが自分に同じような態度を見せた時に、それが日本人の礼儀正しさ、裏を返せば堅苦しさであって、アメリカ流の親しさを表す態度ではなかったことに気づくのである (Nisei 140-1)。

日本への旅でモニカは「本当の」日本人ではないことに気づかされたが、サナトリウムというアメリカ人社会の中では「本当の」アメリカ人ではなく、むしろ知らず知らずのうちに身についた日本人らしさが、心の奥底にあることを知る。しかし、その「外観が違い」、「少しおかしいことを言ったり、したり」する、芯が日本人である自分を受け入れてくれる友達がいることも同時に知ることになる。「人生で初めて」そのままの自分でいいという「本当の幸福」を感じることができたのは、二世の自分探しにとって大きな出来事だっただろう。そのことをより具体的に語られるのが、以下のモニカの手記である。

私がおずおずしていたのは肺病なんかになったからであり、白人達の真中にほおり出された唯一人の日本人だったからでもあった。本当にこれ以上

不幸な境遇は考えられなかった。

私がそれまで住んでいたワシントン州シアトル市の小さな日本人社会では、肺病になればもう満足な一生は送れないものと思われていた。それで私も仕方がないから死ぬつもりにすっかりなって、重い足をひきずってサナトリウムに向ったわけだ。その上なおさら困ったことには、白人達とこんなに一緒に暮らすのは生まれてはじめての経験だった。それまでずっと私は日本人社会の生活しか知らなかった。学校では白人と二世の両方のお友達があったが、放課後は二世としかつき合わなかった。また私は普通の小学校の放課後に別の日本語学校に通い、教会も日本人のメソジスト教会に行っていた。ところで日本人は経済的に白人農民達の手強い競争相手だというのが一つの理由で、西部海岸地方ではあまり評判がよくなかったのである。

療養所では私は借りて来た猫のように大人しくして、誰もあら捜しなどできないようにする決心をした。日本人の血統なのが何だか自分でも恥ずかしくなりそうな気持だった。けれども、ある日ベッティ・バード（後のマクドナルド夫人）が私と一緒にの室にしたいと看護婦長に申し出てからというものは、私には片隅で目立たないように死んでいく暇がなくなったし、それにふさわしい雰囲気も消えてしまった。ベッティが私を選んだのには誰もがショックを受けた。婦長さんにも、又ベッティが選んでよかった他の二人の女性にも、それから誰よりもまず私自身にとって、本当に意外だった。何しろそれまで東洋人と同室したいなどといった人は一人もいなかったのだから。…その後九ヵ月間私達は一緒に暮したが、その間にベッティは私が逃げ込もうとした殻を完全に破ってしまった。それとなく色々な方法で彼女は私に日本人の生れであるのを恥じるいわれのないことを教えた。私たちは日米両国の政治関係についても話をしたけれど、別にお互いに掴み合いの喧嘩もしなかった。自分自身が非常な芸術家であったベッティは日本の美術と絵画を大変愛好していた。全快して退院できるよ

うになったころには、私は自分でも全く人が違ったように感じていた。健康を取り戻したのはもちろんだが、もっと有難いことには、自信と頑丈な神経を手に入れていたのだった。私が米国生まれの権利を持っていることと日本人の血統であることが、はじめて渾然と一つに融合合ったのであった。(モニカ 98)

下線で示したように、ベティと一緒にいた9カ月の間に、モニカは自らが作っていた心の殻を破られ、日本人であることを恥じる気持ちはそれを誇る気持ちへと変えられる。日本人の血統を持つことと、アメリカ人の権利を持つことは矛盾しないという認識に至るのである。

では、そこに至るまでの彼女が抱えていたアイデンティティに関わる問題とは何だったのかを、幼少時にさかのぼって辿っておきたい。

4. モニカの生い立ちと分裂した自己

モニカは幼い頃の思い出を次のように振り返る。「自分が植物なのか動物なのかわからないアメーバのように至福の世界に生きていた」(*Nisei* 3) 彼女が6歳になった時のことである。

母は私たちが日本人だと教えた。私はずっとヤンキーだと思っていた。なぜなら私は何ととってもオクシデンタル通りとメイン通りの交差するところで生まれたのだから。ホテルに住む…モンタナは私をヤンキーと呼んだ。なぜヤンキーであり、同時に、日本人であるのかがわからなかった。二つの頭を持って生まれたようなものだった。それは奇妙で面倒なことのように思えた。何よりもまず、日本人学校に行きたくなかった。(Nisei 18-19)

モニカの両親はともに栃木県出身で、父・糸井誠三は、足尾銅山の鉱毒で被害に遭った村の村長・糸井藤次郎の息子で、母・弁子も、足尾鉱毒事件で闘って投獄された後、牧師となってアメリカでの伝道に渡った永島與八の娘である⁸。法律を学ぶ志を持って渡米した誠三は、肉体労働では学資を貯めることが叶わず、結婚したばかりの弁子と一緒に小さなクリーニング店を営業した後

に、シアトルのウォーターフロントに昔から建っていた労働者向けのホテル経営を始めたのだった。ホテル内に一家は住んでいたが、その住まいの「台所には紛れもなく東洋人が住んでいる痕跡と匂い」があり、「6組の赤と黄色の塗箸と醤油の瓶」、「あざやかな手描きの茶碗、赤い漆塗りの汁物椀、そして母が大事にしている相馬焼の茶器」、「食糧庫には、米袋と1ガロン瓶入りの醤油」、「5ガロンの甕から発する独特の鼻にツンとくる匂いがするキュウリ、ナッパ、ダイコンの漬物」があった (*Nisei* 12)。そして天皇の誕生日を祝う「天長節」 (*Nisei* 66) の式典に出席するのが義務づけられ、毎年6月に行われる「ウンドウ・カイ」と呼んでいた日本学校のピクニック (*Nisei* 71) と、お正月の「カルタという日本の昔のゲーム」 (*Nisei* 80) を楽しみにしていた子ども時代に、モニカはそのような目に見える生活や習慣だけでなく、日本的な感性を身に着けて育つことになる。

しかし、日本への旅行中には、父母の故郷や親戚の人々の様子を心に刻みながらも、村の子どもたちに「アメリカ・ジン！」とはやし立てられ (*Nisei* 97)、「異邦人であると感じ」た (*Nisei* 108) モニカは、約4カ月に及ぶ旅を終えてシアトルの港に帰還する。赤痢に罹った弟のケンジを亡くし、一命を取り留めた兄のヘンリーが回復した後のことだった。その時の様子を彼女はこのようなに記している。「突然、私は重い胸のつかえがとれたような気がした。再び家に帰ったことを実感し、日本への旅は、悲しい魔法にかかった夢のように、背景へと遠ざかって」 (*Nisei* 107) いく。そして、「これが私の家、美しいピュージェットサウンド港が私たちの前に広がっていた。…異なった人種のルーツを持つ人々に囲まれて、私が生まれたこのアメリカ、それでもこれが私の故郷だ」 (*Nisei* 108) と認識する。「本当の日本人に会う」という、その章のタイトルが示しているように、自身が本当の日本人ではなく、アメリカ人なのだという自覚を強く感じる旅となる。

だが、その祖国であるアメリカで日本人排斥が激しくなり、妹・スミコ（サミー）の喘息の療養のため、保養地の貸家を探していた時に、「ジャップ」に

は貸さないという露骨な差別に初めて晒されることになる。大きなショックを受けたモニカに、クリスチャンである母・弁子は、「自分に誇りを持つことを学んでほしい。それは白いから、黒いから、黄色だから、ではなくて、同じ人間なのだから。そのことは絶対に忘れないで。誰に何を言われようとあなたは神様の子どもなの」と諭す。しかし彼女は、「でもママ、日本人だっていうのはそんなに悲惨なことなの？」(Nisei 114)と涙を流し、「一日中私は、自分に流れる日本人の血について反抗的な気持ちと擁護する気持ちの間で引き裂かれていた。しかし、あの女性の突き刺すような言葉を思い出すと、ひりひりと痛む怒りの炎が血管を走って爆発しそうだった」(Nisei 115)と語るように、自分たちが受けているスティグマを実感する初めての体験となる。さらに、「徐々に日本人の血を引いていることに恐ろしい災いが伴うことを他のいろいろな点で知ることになった。国家が進む方向に、国民も進むものだ。日本と合衆国はもはや意見を同じくしてはおらず、日々のくらしにも影響が出ているのを感じていた。日本の軍隊が突然上海に侵入した時、国際事情は悪くなった。市の職員や著名な人々がインタビューを受けると、みな日本の商品への制裁と不買運動を叫んだ。人々は行きつけの日本人の店に行くのを止めた。日本人に雇われていた中国人は次々と仕事を辞めた」(Nisei 118-9)、という社会情勢に呑み込まれていく。そのような中で、ワシントン大学に進むことを夢見ていたモニカは、日系人が、とくに日系人女性は仕事を得るには職業専門学校に行くしか手がないこと、しかしそれでも就職の当ては限りなくないに等しいことを屈辱的に告げられる。モニカは大学で友達に追いつくことを目指して努力し、専門学校の2年過程を1年で終えてようやく大学に通えることになった頃の結核発病だったのだ。

5. モニカとベティのつながりの原点

先に述べたサナトリウムでの出会い以降の二人の友情と信頼関係は、*Nisei Daughter* の中でも触れられている。真珠湾攻撃後、日系人排斥の運動がいよ

いよ激しくなつて一家が日本に関連するものをすべて焼き捨てざるを得なくなった時に、モニカが日本人形をクリスに預ける場面 (*Nisei* 155) や、ぬかるみだらけのピュアラップ仮収容所 (Puyallup Assembly Center) でクリスに長靴を差し入れてもらう場面 (*Nisei* 180) である。

二人に12歳の年齢差がありながら、そのような友情に結ばれるに至った背景には、当時は死を意味した結核という感染症への恐怖と共に体験し、病を乗り越え、また *The Plague and I* に詳しく描かれているように、退院した後も結核感染者に対する偏見と病気から復帰する苦しさを一緒に乗り越えてきた思いがあっただろう。しかし、そのような状況だけでなく、二人には何よりも互いを高め合う共通した価値観と資質があつたに違いない。それらをモニカの *Nisei Daughter* と手記、そしてベティの *The Plague and I* に描かれる互いの人物評から読み取りたい。

まず、モニカは *Nisei Daughter* と手記の中でベティについてこのように記している。

私は彼女の素晴らしいユーモアと生きることへの抑え難い熱意に触れずにはいられなかった。私が沈んでしまった自己憐憫の穴から、明るい日差しに少しずつ誘われていくように感じた。毎朝クリスは『おはようございます』という日本語で、私の意識もうろうとした眠りを破り、主任看護師がまた何か怒っているわよと私に注意した。 (*Nisei* 139)

有名になつてもベッティの人柄は少しも変わらなかった。彼女はやはり前と同じように他人を助けることを考えていた。一生を通じて働きかつ闘つて来たベッティには、バラバラになった生活の断片を一つ一つ継ぎ合せて更生の第一歩を踏み出そうとする西部海岸地方の日本人の苦労がよく判った。ベッティは自分の農園を日本人達に貸し、その時もまたその理由として日本人が農民として一番有能だからとってくれた。…多くの人々にとってはベッティ・マクドナルドは一夜にして成功したようにみえるかも知れない。けれども私はそれがそうではないことを知っている。今日有

名なベッティ・マクドナルドは、私の憶えている最初にサナトリウムで会った時、すでに成功に必要な条件—素晴らしいユーモアの感覚、深い温かい心、そして夥しい勇氣—を備えていた。肺病と取り組む勇氣、人間としての待遇を受ける日本人の権利のために闘う勇氣、そして常に自分を見失わない為に必要な勇氣を彼女は持っていた。後に彼女の得た物質的成功はただその当然の結果としか思えない。(モニカ 99)

一方、ベティのモニカへの賛辞は *The Plague and I* の中でこのように記されている。

優しく聡明で、思いやりがあり機智に富んだ、美しいキミと同室の友になったことがどんなに幸運であったか、そのことを私は何度も何度も思い返した。(Plague 74)

残念なことに、財産や仕事を取ってしまうと、安物のゴルフボールのようになってしまう人があまりにも多すぎる。少しずつ解いていっても、純粋なゴムの芯に行きつくことはない—そんなものは初めからないからである。ところが、キミの場合は、解き始めるとすぐに彼女の美しい外皮の下が大部分芯であることがわかった。「ねえベティ、それは何もあたしの人格のせいじゃないのよ。ただ、もし結核にかかるんだったら、日本人である方が耐えやすいというだけのことだわ。」(Plague 75)

彼女と同室してみてわかったのは、二人は知性の点では互角だが、感情の点では彼女の方が優れている、ということだった。私が彼女に勝っているのは経験だけだった。それは間違った見方だと彼女は言った。そう見えるのは彼女が日本人だからというだけのことで、なにも質問しないで服従することに慣らされているからに過ぎないと言った。(Plague 125)

以上の *The Plague and I* に描かれた、ベティの賛辞に対するモニカの応答に注目したい。下線に示したように、ベティが指摘するキミ(＝モニカ)の優れている点を、モニカは日本人の特質だと説明するのである。もちろんそこには日本人の我慢強さや服従の精神を揶揄するニュアンスもある。また、褒められ

たことに対する日本人特有の謙遜の気持ちが表れているかもしれない。しかし、ベティの指摘によって、日本人らしさの良い点をモニカはここで新たに自覚するようになったのではないか。また、先の引用の下線で示したように、ベティが自分の農園を日本人達に貸すのは、「日本人が農民として一番有能だからとってくれた」(モニカ 99) ことも、モニカの日本人への理解を深める大きな要因になっただろう。

さらに、黒人を蔑む発言を聞いたキミ(=モニカ)は、人種差別に対して堂々と挑んでいく面も見せている。チャーリーという回復期の患者が、「もう長くは持たないやつが一人いるんだ。…ああいったニガーは結核には抵抗する力がないってことさ」と言うと、女性患者のアイリーンが「ニガーなんかと一緒に風呂に入りたくないわ。ニガーって、いやな匂いがするんですもの」と言ったという文脈でのキミの発言である。「日本では(They Japanese)白人は匂いがすると思っているのよ」と言う。それに対して、アイリーンに「ジャップが白人と違う匂いがするっていうの？」と詰め寄られても、キミは毅然として、「わたしたち日本人(We Japanese)は全然匂いがしないというのがわたしたちの意見(our opinion)なんです」(Plague 84-5)と答えるのだ。

このように、キミ(=モニカ)の発言には、人種問題で引っ込み思案になり日本人であることを恥じて殻を作っていた入院当初の姿はない。彼女は、自分の中にある日本人の気質が優れている点であるとベティに指摘されることによって、自分をありのままに肯定するきっかけを見出す。「彼ら日本人」という第三者の立場ではなく、「わたしたち日本人の意見」だと誇りをもって言えるようになっていくのだ。

そして、キミは人種差別だけでなく、社会の男性優位についても次のように指摘する。

キミはいつもの小さい、高い声でいった。「わたしが今まで観察したところでは、この世のなかのことはすべてにおいて、男の人のほうが恵まれているわ。このパイン・サナトリウムにしても、男性用の安静病棟では、

男の人は入院したその日から、すべての日刊新聞を読むことができるのですもの。」シルビアが「男性は女性より強いから安静にする必要がないのよ」と言うと、キミはこう反論した。「それはおかしいわ。院長も男性だからよ。院長はきっとこんな風に考えているのよ、『女の心はちっぽけなものだ。女なんてものは、一日24時間30日連続で、つまり合計720時間、何もしないで横になっていることができる。だが男の心は大きいので何か考えるものを与えてやらなければならない。だからすぐに新聞を読むことを許してやろう』ってね。」(Plague 52)

Nisei Daughter には、このようにモニカのジェンダー意識を直接的に語る場面はない。しかし、女性は仕事がなくとも結婚すればよいとばかりに縁談を持ってくるマツイ夫人に対して突然モニカが笑いだす場面 (*Nisei* 136) などに、彼女のジェンダー意識と自立を目指す意志を読み取ることができる。最初に述べたように、このタイトルは二世であり娘であるという二重の足枷を暗示しているように思われるのである。

6. *Nisei Daughter* の新たな読みの試み

1979年版の序文で、モニカ・ソネは、「日系人は（その時行われていたアメリカ政府への）補償運動によって他の民族への同じような不正義が止むことを願っている」と書き、民主主義社会の責任と公正な正義が行われることの大切さを訴える言説の引用で閉じている⁹。これは Wong も指摘しているように、*Nisei Daughter* の抑制した語りには見られない、主張を込めた熱い口調である¹⁰。しかし、彼女の考え方そのものが、作品の発表後四半世紀のうちに当然深化したとは言え、変化したとは思えない。これまで示してきたように、*The Plague and I* に描かれる18歳のモニカに、日本人差別だけでなく、あらゆる人種やジェンダーによる差別に立ち向かう方向性がすでに見られるからである。

もちろん文学作品はそこに書かれたもので評価されるべきであるが、そのような別の角度から見た作者像を知ることによって、作品に隠された意図やメッ

セージを読み取ることができるという点で、本稿で取り上げた二人の手記とベティの作品を新たな解釈の糸口とすることは有効であると考ええる。

その試みの一つとして取り上げたいのが、以下の *Nisei Daughter* のエンディングの言葉である。

私は相変わらず東洋人の目をしてはいたが、これまでとは全く異なった展望を持ってアメリカの本流の生活に戻ろうとしていた。今や私は、悲しくも二つに裂かれた人格を持つのではなく、一つにまとまった人間になったと感じていた。自分の中の日本人の部分とアメリカ人の部分が融合したのだ。(Nisei 238)

アメリカ社会への同化を示すと評されるこの言葉は、これまで楽観的過ぎるという評価が多くなされてきた。例えば、辻は白人優越主義のアメリカにモニカがモデル・マイノリティとして吸収されたと結論づけ、Yogi は当時は多くの日系人がアメリカの主流に同化しようと試みていた時代であったと指摘し、物語のエンディングの言葉は驚くことではないと述べている。それとは対照的に Sumida は、モニカが当時の流れとは反対に、日系であることを肯定して多文化主義を提唱していると論じている。ただ最後の言葉だけがショックを受けるほど同化主義者の決まり文句となっていて、Sumida は日系三世である自分としてはその箇所は批判的に読みたいと述べる。

ここで書かれている「アメリカの本流の生活」に戻るというのは、収容所に隔離されることによって、「アメリカの一般社会から遠ざかり、脇に置かれ、周辺存在になった」(Nisei 198) 生活から解放されて、「1943年までには、二世は人生の本流に戻ることができた」(Nisei 216) ことを意味する。しかし、モニカは立ち退きによって姿を消したシアトルの日系コミュニティに戻ることはできない。それは、当時立ち入りを禁止されていた西海岸に戻るのではなく、アメリカ東部で独り働きながら大学で学ぶ新しい生活である。この時、彼女は初めて日系社会を出て、サナトリウムというアメリカ人社会に「放り込まれた」6年ほど前の体験を重ねて思い起こしていたことだろう。

サナトリウムに入った頃のモニカを振り返ると、アメリカの文化や価値を身につけつつも、日系人コミュニティで培われた日本人の精神を内面化しており、「本当の」アメリカ人ではない自分を自覚していた。それは、ブロードウェイ高校に入った時に、クラスで自分の意見を述べるように求められても、日系の生徒は「岩のように座っていた」という回想にも表れている。モニカはそれが「日本人だったから」と述べ、「大失敗を大声で晒すよりも、静かにして愚かに見える方が良いと感じる」日本人を「沈黙する国民」と考える。そして、的外れであっても「自分の意見を聞いてほしいと叫ぶ仲間の学生を羨ましく思い」、「赤いトマトのように顔を火照らせることなく最も簡単な意見をクラスで言うことができるようになったのは、長い苦しい闘いの後だった」(*Nisei* 131)と述懐する。

そのような「日系二世」という立場で、自らのアイデンティティを見出すための苦悩を背負い、しかも通常の移民とは異なって、敵国人としてヘイトの対象になっていたために、自分の中の日本人をより意識せざるを得ず、それを恥じて殻にこもっていた。先に引用したように、自我が目覚めた頃の「ヤンキーであり、同時に日本人である2つの頭を持つ」自分への幼い戸惑いは、青年期になって、「日本人の血について反抗的な気持ちと擁護する気持ちの間で引き裂かれる」葛藤となる。作品の最後の言葉はそうように背負ってきた、「悲しくも二つに裂かれた人格を持つ」自分を指す。そして先に述べたように、ベティとの出会いを経て、モニカは自分の中の日本的なものを肯定し、そのままの自分で良いという「幸福感」と自信を得ていた。

それでも、ベティとの出会いの後の戦争前夜や戦争中の収容所において、モニカの心は何度も揺れ動く。日系人にとって信じがたい真珠湾攻撃のニュースを聞き、「古い傷口が再び開き、今や敵となってしまった日本人の血を持っていることで、内に逃げ込もうとしている自分に気づいていた」(*Nisei* 145)と語られる通りである。しかし、仮収容所となったキャンプ・ハーモニーで、モニカの人生にとって重要となる以下のようなもう一つの出会いの時が訪れる。

日曜日は、感情を隠して忙しく仕事をすることから解放されて、一旦立ち止まる日になっていた。午前中は、毎週日曜日に訪ねてくれるエベレット・トンプソン牧師の話を書くために教会に行った。…野球場の正面観客席の下チャペルとして使われている薄暗い仮設の部屋に、私たちは打ちのめされた心で集い、説教と祈りのたびに心を新たにされた。牧師は、私たちが少しずつ新しい視野に立って生きていく拠り所を築く助けとなってくれた。彼が詩篇の一部を声を揃えて読むようにと言った、ある日曜日の礼拝を特に覚えている。私たちの状況と環境の中であって、聖書の一節に新しい意味と慰めを見出そうと、ゆっくりと注意深く読み始めた。…

私たちがこれらの行を読み終えた時、…囲んでいた壁が押し戻されたかのように、その部屋は平和と畏怖に満ちており、私たちは自由になった。キャンプでのこの生活は私たちの人生の終わりではなく、ほんの始まりに過ぎないということを確認した。…私たちの最大の試練は精神的なものであることがわかった。現実の、また想像上の偏見について、私はこれまでずっと神経を尖らせ、怒り続けてきた。立ち退きは最大の打撃だったが、人々に裏切られたと苦々しく思っても冷笑しても、何も得られるものはなかった。私たちが望んでいる生き方を築くために、自分自身の魂を見つめ、神への信頼を持ち続けることがより重要な時が来ていた。(Nisei 185-6)

強制収容所という極限の試練の中で自身の内面と対峙し、神への信頼を深めたモニカは、自らの生き方を問い直し、正義と平等の意識を強くする。そのような得た平安と希望は、次のような新たな自分の発見と未来への期待へと導く。

それまで、私にとってアメリカとは、美しいシアトルの街であり、小さな日本のコミュニティであり、そして自分自身になるための必死の闘いを意味していた。私は今や過去を脱ぎ捨てていたので、ハイフンで繋いだ日系・アメリカ人の気質を引き裂くのではなく、それに力を与えてくれるアメリカの別の側面を知ることができるかもしれないと期待していた。

(Nisei 216)

自分は何者かという問いに対して、モニカはエスニシティを持ったアメリカ人として生きる権利を有する人間であるという解答をここで改めて確認したと理解できるだろう。先に挙げた、「一つにまとまった人間になったと感じ、…自分の中の日本人の部分とアメリカ人の部分が融合した」という作品のエンディングはその延長線上にある。しかも、そのエンディングが書かれたのは、モニカが1952年に『婦人朝日』に宛てた手記に「米国生まれの権利を持っていること」と「日本人の血統であることと」が「はじめて一つに融け合った」と書いていた頃に重なることに注目したい。これらを重ねて読むことによって、このエンディングは日本人の部分を保ったままでアメリカ人として生きていくという揺らぎのない自己肯定を指していると読むことが可能と思われるのである。確かにモニカは、一世の人々から伝えられた日本の文化と同時に、生まれた国であるアメリカの価値や文化を吸収してきた。しかし決して一方に吸収されたのではない。

これは、後の序文での強制収容を不当とする人権運動の発言につながるものである。*Nisei Daughter* は、ユーモアを散りばめて淡々と穏やかにではあるが、モニカ・ソネの主張が静かに語られた作品と言えるのではないだろうか。

おわりに

The Plague and I で、入院中にすでに「キミは精神医学を研究しようと決心した」(*Plague* 208) と書かれている。*Nisei Daughter* の終章では、ワシントン大学では文学を志していたが、ウェンデル・カレッジで音楽、歴史、時事、宗教、哲学、社会学への興味を経て、最終的に人が好きなことから心理学に絞られ、臨床心理に進むことになったと述懐する。

モニカはその決意の通り、ケース・ウェスタン大学で臨床心理士の修士号を取得し、臨床心理士として、またカトリック・コミュニティー同盟でソーシャル・ワーカーとして歩んだ。キミがサナトリウムでの同室の友人に「悲しまないで。私たちはあなたの友達だし同じ思いでいるわ」と言うのを聞いたベティ

は、「キミの語る言葉はいつでも、羊皮紙の片隅に桜の小枝か一輪の菖蒲を描くような響きを持っていた」(*Plague* 77)と書いている。差別と偏見を体験し、自らの心と向き合い続けた経験は、今度は他人の心の声を聴く仕事へと導いたと思われる。また、モニカの言葉が一輪の花を描くようだとベティが表現しているが、それは *Nisei Daughter* の風景や心象の描写にも共通するものである。母・弁子の詠む短歌がこの作品で紹介され、またその文体を家族がからかう場面がユーモアと愛情を持って描かれているが、モニカの感性にも、歌人・詩人であったその母（ペンネーム・糸井野菊）の影響が現れているのは明らかである¹¹。

92歳で亡くなったモニカ・ソネの追悼記事では、二冊目の本を執筆中だったという¹²。二世としてのその後の歩みが記されていたであろう未完の原稿には、ベティとのその後の交流が豊かに描かれていたと思えてならない。

注

*本文中の引用は主に参考文献の最初に挙げた4つの文献からであるが、ページの前に以下のように略して示した。また引用中の下線はすべて筆者による。

Nisei Daughter (Nisei)、*The Plague and I (Plague)*

モニカの手記（モニカ）、ベティの手記（ベティ）

**Nisei Daughter* は、An Atlantic Monthly Press Book として、Boston: Little, Brown and Company から1953年に出版された。その後、Monica Sone の Preface と Frank S. Miyamoto の Introduction を加えて、1979年に University of Washington Press から再版された。2014年版には、Marie Rose Wong の Introduction を加えている。再版のため、本文のページはどの版も同じだが、Preface と Introduction のページについては、以下の注に何年版であるかを記した。

**Nisei Daughter* の中の、真珠湾攻撃から強制収容所を出て大学に入るまでを描いた8章から12章を簡潔に要約した日本語訳が、英文の初版が出た1953

年に以下の雑誌に掲載されている。モニカ・曾根、山室まりや訳「二世ムスメの戦争記録—真珠湾シヤトルにこだます」、『文藝春秋』31巻第13号、昭和28年9月号、166-180。

＊引用した日本語について、『婦人朝日』掲載の二つの手記は訳者の記載がなく、編集部訳と思われる。旧仮名遣いと旧漢字だけを改めてそのまま引用した。*Nisei Daughter* は筆者訳であるが、*The Plague and I* については『病氣と私』の瀧口直太郎訳に修正を加えた。

＊現在では差別用語として使われない言い回しや用語が引用の部分にあるが、原文を尊重してそのままにした。

1. 社会学者のフランク・ミヤモトの *Nisei Daughter*, 1979年版への Introduction が挙げられる。また、Blankenship は日系人とキリスト教についての研究に、そして Fiset がキャンプ・ハーモニーでの検証に *Nisei Daughter* から多く引用している。他にも Cheung などが歴史的証言としてこの作品に言及している。そのように文献として引用されるだけでなく、Sumidaによると、アジア系アメリカ人の歴史を知る写真展や映像展で、モニカ・ソネの言葉がキャプションや語りとして使われているという。
2. Wong, xviii. (*Nisei Daughter*, 2014年版)
3. *New York Herald Tribune*, *San Francisco Chronicle*, *Asian American Art Journal* の書評の一部が *Nisei Daughter*, 1979年版の裏表紙に載せられている。また、Wong による Introduction (*Nisei Daughter*, xviii 2014年版) では、*The Seattle Times* や *Christian Science Monitor* で高評価されたと紹介している。
4. こののち、ダニエル・イノウエなどの日系議員の努力によって段階的に法案を通過させ、1988年に「市民の自由法」がレーガン大統領によって署名された。これによって抑留日系人への補償が始まることになった。

5. 後述するように、参考文献に挙げた Sumida、Yogi、辻などの議論がある。
6. 日本では、瀧口直太郎訳で1950年に『病氣と私』、1951年に『卵と私』が雄鶏社から出版されている。
7. 彼女の自伝全4冊をそれぞれ短縮してまとめ、*Who, me? The Autobiography of Betty MacDonald* (J. B. Lippincott Company) というタイトルで2021年に出版されている。
8. 永岡正己「永島與八の生涯と社会的実践(2) 渡良瀬川の畔に生まれて～川俣事件まで」、『キリスト教文化 Vol.16』2020, p.103.
9. Monica Sone, xvii. (*Nisei Daughter*, 1979年版)
10. Wong, xxiv. (*Nisei Daughter*, 2014年版)
11. 戦時中、日系の文芸誌が破棄を余儀なくされ、幻の文芸誌と言われた『収穫』の全6号(1936,12~1938,6)が『日系アメリカ文学雑誌集成』全22巻の中の①として、1997年に不二出版から復刻されている。糸井野菊はその第2号から詩を寄せ、第5号の編集者の一人となっていた。
12. [https://www.legacy.com/us/obituaries/indeonline/name/monica-sone-
obituary?id=24750544](https://www.legacy.com/us/obituaries/indeonline/name/monica-sone-obituary?id=24750544) (2022.8.7閲覧).

参考文献

1. モニカ・ソネ「ベッティ・マクドナルド夫人と私」、『婦人朝日』朝日出版社、1952年1月号。
2. ベティ・マクドナルド「『病氣と私』のキミ」、『婦人朝日』朝日出版社、1951年7月号。
3. Sone, Monica. *Nisei Daughter*. An Atlantic Monthly Press Book, Boston: Little, Brown and Company, 1953.
4. MacDonald, Betty. *The Plague and I*. Hammond, Hammond & Co. Ltd., 1948. renewed 1976. paperback edition, University of Washington Press, 2016.

- (日本語訳) ベティ・マクドナルド、瀧口直太郎訳『病気と私』雄鶏社、1950年。
5. Miyamoto, S. Frank. "Introduction to the 1979 Edition." *Nisei Daughter*. University of Washington Press, 1979.
 6. Wong, Marie Rose, "Introduction to the 2014 Edition." *Nisei Daughter*. University of Washington Press, 2014.
 7. Sumida, Stephen H. "Protest and Accommodation, Self-Satire and Self-Effacement, and Monica Sone's *Nisei Daughter*." *Multicultural Autobiography: American Lives*, edited by James Robert Payne. University of Tennessee Press, 1992.
 8. Yogi, Stan. "Japanese American Literature." *An Interethnic Companion to Asian American Literature*, edited by King-Kok Cheung. Cambridge University Press, 1997.
 9. 辻美奈子「*Nisei Daughter*に見るモデル・マイノリティの描かれ方—アメリカの人種差別構造に関する一考察」、『多元文化』名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻 編 (5) 2005。
 10. Fiset, Louise. *Camp Harmony: Seattle's Japanese Americans and the Puyallup Assembly Center*. The University of Illinois Press, 2009.
 11. Blankenship, Anne M. *Christianity, Social Justice, and the Japanese American Incarceration during World War II*. The University of North Carolina Press, 2016.
 12. Cheung, King-Kok. "Re-Viewing Asian American Literary Studies." *An Interethnic Companion to Asian American Literature*, edited by King-Kok Cheung. Cambridge University Press, 1997.

The Background on Monica Sone's *Nisei Daughter* —Her Friendship with Betty MacDonald—

Kiiko Nagaoka

Betty MacDonald, known for *The Egg and I* and *The Plague and I*, was asked to write a new year's message for *Fujin Asahi*, a Japanese women's literary magazine. Because she was unable to send the message, she sent a letter to apologize. In her letter to the editor, she wrote mainly about Kazuko Itoi, better known as Monica Sone, her Japanese-American friend, and *Fujin Asahi* published it in July 1951. In response to this, Monica wrote "Mrs. Betty MacDonald and I", and it was published in the same magazine in January 1952.

These articles reveal that Kimi in *The Plague and I* is actually Monica, Chris in *Nisei Daughter* is Betty. They also show that Betty recognized Monica's remarkable literary talent from an early age and introduced her to the editor at Atlantic Monthly Press. Encouraged by this editor to write about her experience as a Japanese American in the US, Monica started writing *Nisei Daughter*, which was first published in 1953.

This background information makes three points that are helpful to understanding *Nisei Daughter*. The first is that Betty MacDonald's recommendation enabled *Nisei Daughter* to be published earlier than other books about the Japanese American experience in relocation camps. Secondly, these two autobiographical authors shared the same values and the courage to stand up for human rights, and influenced each other's

humor and style of writing. Lastly, their friendship helped Monica to search for her identity since Betty recognized her as both an American and as a Japanese American. Monica realized for the first time that having the rights of an American citizen and Japanese descent made for a harmonious blend at the end of the story.